

一方、不安全行動の場合は、なぜやったの?と尋ねられたら、「ほかのことを考えていたから」、「急いでいたから」など、理由を説明できる場合が多いです。不安全行動のうち第3象限は「ルール違反」になりますが、やっかいなのは、第2象限の「結果オーライ」です。

第2象限は、ルールや手順が守られておらず手抜きや馴れ合いがあるのですが、でも意図した結果が得られている結果オーライですから、本人は「上手く行ったんだから、まあ、いいか…」と反省も何もしないし、同僚も上司も注意しない場合がほとんどです。下手に注意しようものなら「あなたも以前にやりましたよ!」などと言われてしまうことがあるかもしれません。なぜ、改めさせようと注意しないのか。それは、「注意すると職場がギスギスする」、「どうせ言っても変わらない」、「しつぺ返しがあるかもしれないので言うだけ損!」など、まさに氷山モデルの仕事の進め方、人と人との関係が根強くはびこっているからです。

- 自分がしなくても誰かがやってくれるだろうという思い込み
- 何もしなくても大したことにはならないだろうという過小評価
- 面倒なので気づかなかったことにしようという逃避

の3つがあると言われています。そして、こういう傍観者の心理が働く背景には、氷山モデルの水面下のソフトの部分に影響しているのです。



先程、荻山中央執行委員長の挨拶の中で、ハイインリッヒの法則の話が出ました。大きな事故を説明する場合に、ハイインリッヒの法則1…29・300の話がよく引き合いに出されますが、でもこれは、事故や輸送障害や注意事象などのように不具合が顕在化して目に見えるようになった事象の法則です。

水面下には、不具合が目に見えない結果オーライの部分があります。この結果オーライは

ルールや手順から逸脱しています。が、たまたま事故や輸送障害にならなかったもので、ハイインリッヒの法則からすると、結果オーライは3千かも、3万かも、30万かもしれません。

ある意味、事故予備軍がこの「結果オーライ」の中にあふれているわけです。ちょっとしたきっかけでこの「結果オーライ」は、注意事象や輸送障害や事故になる可能性があるわけです。我々は事故が起ると、「事故には必ず原因がある。その原因を見つけ出して対策を取れば事故はなくなる。」と思っ

ていますが、同じような事故が繰返し起こっています。それはなぜでしょうか。昨今は、非常に複雑なシステムになっていきますから、事故に関わるすべての原因を見つけるのは難しくなります。仮に事故原因がすべて見つかったとしても、それぞ

れの原因すべてに有効な対策を打つことはできません。ですから、この「結果オーライ」があふれている限り、事故はなくなりません。不安全行動で意図した結果が得られなかった場合は、第3象限のルール違反となりますから、この第3象限にメスを入れるのは当然ですが、第2象限の結果オーライのところにもメスを入れない限り、事故は減らないわけです。

ハイインリッヒの法則に結果オーライを加えた考え方は、私が広島にいた10年前に作ったもので

で、ネクストステップ研修や安全ミーティングでこういう話をしてきました。でも、実際「結果オーライ」はなかなかなくなりませんし、結果オーライとヒューマンエラーはまさに紙一重の関係にあります。

これはご存じのスイスチーズモデルです。スイスチーズには穴がたくさん空いているようです。スライスしたチーズを重ね合わせて、そのすべての穴を光が通り抜けたときに事故が起こる。その1枚1枚がたとえばm-shellerのMやSやHやEやLで、どれか一枚でも、チーズの穴がふさがってれば事故は起こらない。そして、状況によってチーズの穴の大きさは常に変化し、位置は常に移動している、というものです。「結果オーライ」の場合は、ルール違反をして、その1枚の穴に光が通っても、他のどれか一枚のチーズの穴がふさがって光が通らないので、直ちに事故や輸送障害にはなりません。でも、結果オーライを見てみぬ振りをして放置していると、いつかはふさがっていたはずのチーズの穴に光が通ってしまっ

### 国土強靱化と鉄道強靱化

と、そして、ヒューマンエラーとなってしまうわけです。

前置きが長くなりましたが、安全を支える客動の事例について話をしたいと思います。鉄道強靱化について話をする前に、国土強靱化について話をします。国土強靱化という言葉については、日頃耳にされていると思います。が、法律名はすごく長くて「強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」と言います。

基本方針としては、大規模自然災害が発生した場合でも人命を守り、社会の重要な機能が致